

宋代語録における語気副詞について

竹田 治美
Takeda Harumi

1 はじめに

宋代は社会の繁栄によって、多くの優れた通俗作品が盛んになり、言語も著しく変化した時代である。

本稿は、宋学の語録『二程語録』、『龜山語録』、『上蔡語録』、『張子語録』、『朱子語録』¹⁾（以下語録）に焦点を合わせて、語気副詞について分析したものである。

これらの語録に宋代の口語・俗語が多く記録され、当時の言語状況を反映したものであり、共時性の高い文献として近世の口語を研究するには重要な資料である。

ここで取り上げる語気副詞とは、ある種の語気・語勢を表す。語気副詞の使用によって、話し手の表現・意図や情意が強調され、感情的色彩が強く伝わる効果がある。

語気副詞の機能や性質については異説も多い。語気を示す副詞は、副詞であるか助詞であるかといった議論や、語気を強調するより、文の内部の高層述語について主観的に判じ定める役割であるなどといった見方があり、学説も多岐にわたっている。

本稿では、副詞の基本的な概念や機能に基づき、この種の語彙は主に動詞と形容詞を制限、修飾する役割であることから副詞として取り扱うことにする。語録ではこれにあたるものは90種類ある。ここでは、語気副詞を性質によってさらに3つに分類する。①肯定・強調の語気を示すもの。②推測・婉曲を示すもの。③疑問・詰問を示すものである。

2 宋代語録における語気副詞

2-1 肯定・強調の語気を示すもの

この種の語気副詞は、物事の状態・属性を肯定し、強調する。語録では用法が柔軟であり、主に動詞・動詞構造、形容詞、形容詞構造を修飾し、状語の働きをする。また、文の全体を修飾することができる。一部の語気副詞は名詞・名詞構造を修飾することもできる。語録では39種類ある。「本」、「本来」、「本自」、「必」、「必當」、「必定」、「必將」、「必須」、「畢竟」、「便」、「誠」、「誠然」、「定」、「都」、「斷」、「斷然」、「分明」、「固」、「固然」、「固自」、「果」、「果然」、「決」、「決然」、「全」、「全然」、「確」、「確然」、「真」は前代から継承され、引き続いて使用されている。「畢竟」、「必定」、「到底」、「的確」、「決定」、「其實」、「確實」、「索性」、「一定」、「真箇」は近古に登場したものである。

以下語録の用例である。

括弧の中は書名、巻数と底本の葉数を示す。

「二」は『二程語録』25巻を示す。(中華書局2004年版)

「龜」は『龜山語録』4巻を示す。(中国国家図書館蔵宋福建漕治刻本版本影印原書)

「張」は『張子語録』3巻を示す。(中華書局1978年版)

「上」は『上蔡先生語録』3巻を示す。(明正徳八年汪正刻本)

「朱」は『朱子語類』140巻を示す。(中華書局1986版、2005年印)

「本」・釋氏本怖死生，為利豈是公道？(二・13-139)

・曰：我本不欲行、他兩脚自行。豈有此理？(二・1-2)

「本来」・這是本來自合恁地滔滔做去，止緣人為私意阻隔，多是略有些發動後，便遏折了。(朱・59-1382)

「本自」・聖賢言語本自分曉，只略略加意，自見得。(朱・11-177)

「必」・故哭死而哀，非為生也；經德不回，非干祿也；言語必信，非正行也。(上・上-3)

「必當」・若衆人，必當就禮法。自大賢以上，則看佗如何？(二・18-211)

「必定」・若不盡見，必定有窒礙處。(朱・19-435)

「必將」・，詢謀已是僉同，鬼神亦必將依之，龜筮亦必須協從之。(朱・63-1544)

「畢竟」・苟不然者，才劫之以不測，又畢竟信也。(張・上-314)

「必須」・曰：“百姓意在爭財，其實無他，若并其實付有司，非惟所訴之事不得其直。必須先按其指斥乘輿之罪，百姓無知，亦可憐也。(龜・4-2)

「便」・孟子曰難言也，明道先生云只他道箇難言也，便知這漢肚裏有兩許大事。(上・上-1)

「誠」・當時欲一二人動之，誠如河濱之人捧土以塞孟津、復可笑也。(二・2上-29)

「誠然」・蓋『易』之書，誠然是「潔淨精微」。(朱・68-1696)

「定」・且如天地間人物草木禽獸，其生也，莫不有種，定不會無無種子白地生出一箇物事，這箇都是氣。(朱・1)

「都」・後世如曹參，可謂能克己者攻堅陷敵是其所長，至其治國為天下，乃以清靜無為，為事氣質都變了。(龜・4-10)

「斷」・發若中節者，有何不可。至如意、必、固、我，則斷不可有，二者焉得而對語哉。(朱・36-955)

「斷然」・分明說：“其交也以道，其接也以禮，斯孔子受之”。若以不法事相委，卻以錢相惠，此則斷然不可。(朱・13-242)

「分明」・若文王，則分明是大聖人也。(二・18-213)

「固」・徃徃沿此，遂破蕩產業者固多矣。(龜・3-17)

「固然」・問：“大抵學便要踐履，如何”？曰：“固然是。『易』云：“學以聚之，問以辨之。既探討得是當，又且放頓寬大田地，待觸類自然有會合處”。(朱・13-241)

「固自」・又問：“割股一事如何”？曰：“割股固自不是。若是誠心為之，不求人知，亦庶幾”。(朱・17-385)

「果」・伊川使人語之曰：切未可動著，即三五年不能定。疊去未幾變之，果紛紛不能定。(上・上-6)

「果然」・至如易，雖言元者善之長，然亦須通四德以言之，至如八卦，易之大義在乎此，亦無人曾解來。乾健坤順之類，亦不曾果然體認得。(二・15-154)

「決」・多是要求濟事，而不知自身已不立，事決不能成。(朱・13-236)

「決然」・如為人謀一事，須直與它說這事合做與否。若不合做，則直與說這事決然不可為。(朱・21-488)

「全」・如此、是物先有箇性、坤因而生之、是甚義理？全不識也。(二・19-251)

「全然」・學者喫緊是要理會這一箇心，那紙已說底，全然靠不得。(朱・9-152)

「確」・信道篤而不弘，則是確信其一說，而或至於不通，故須著下兩句。(朱・49-1199)

- 「確然」・因舉濂溪說：“果而確，無難焉”。須是果敢勝得私欲，方確然守得這道理不遷變。(朱・24-573)
- 「真」・邇來學者何足道，能言真如鸚鵡也。(上・下-5)
- 「必竟」・與佛家之言相反，儘教說無形迹，無色，其實不過無聲無臭，必竟有甚見處，大抵論語間不難見。(二・23-307)
- 「必定」・蓋道理至廣至大，故有說得易處，說得難處，說得大處，說得小處。若不盡見，必定有空礙處。(朱・19-435)
- 「到底」・禪者云：“如桶底脫相似”。可謂大悟。到底不曾曉得，才遇事，又卻迷去。(朱・60-1437)
- 「的確」・『易』如此說亦通，如彼說亦通。大抵不比『詩書』，的確難看。(朱・67-1660)
- 「決定」・若欲與湯進之同做，決定做不成，後來果如此。(朱・131-3152)
- 「其實」・釋氏其實是愛身，放不得，故說許多。(二・2上-34)
- 「確實」・敬義夾持，是退步收斂，確實靜定工夫，故曰〈坤〉道。(朱・69-1717)
- 「索性」・如今人見學者議論拘滯，忽有一箇說得索性快活，亦須喜之。(朱・40-1032)
- 「一定」・蓋主宰運用底便是心，性便是會恁地做底理。性則一定在這裏，到主宰運用卻在心。(朱・5-90)
- 「真箇」・如高宗夢傳說，真箇有傳說在傳嚴也。(二・23-307)

「本」、「本来」、「本自」は述語に前置し、物事が本来持っている属性を強調し、後の状況とは異なっていることを示す。「本」は上古から引き続き使用されている。否定副詞「不」、「無」と連用し、さらに口調を強める。「本来」、「本自」は中古に登場した。「本」、「本来」は現代語にも頻用されている。「本自」の「自」は接尾辞である。

「必」、「定」は上古から副詞として常用されている。語録では「必」の用例が3,000以上ある。主に述語の前に置かれ、物事の成り行きが必ず推測した方向に向くことを強調する。「必當」、「必定」、「必將」、「畢竟」、「必須」は類義副詞の複合形式である。物事が条理的にそうであることや態度がきっぱりしていることを主張する。

「斷」、「斷然」、「固」、「固然」、「固自」、「決」、「決然」は主に動詞を修飾し、事実の推論・判断の確実性を強調する。「必」、「必然」より口調が強い。また否定形式で「断じてしてはならない」という意味で用いることが多い。これらの副詞は現代にも存在している。

「誠」、「誠然」は動詞・形容詞述語に前置し、口調を強めて物事が真実であることを表す。

「果」、「果然」は主に動詞述語の前に置かれ、予測と事態が一致したことを強調する。語録では、誇張表現で用いることが多い。この用法は現代語にも頻用されている。

「確」、「真」は述語に前置し、状語になる。行為、状態が確かであることを肯定、強調する。「真」は宋代以後の白話文学に用いられ、さらに発達し、複雑な用法がもたされた。現代語においても使用頻度の高い口語表現である。

「必須」、「必定」、「決定」は「必」、「定」、「須」、「決」という類義副詞が複合化し、発展したものである。これらの副詞は主に述語を修飾し、判断・推測の確実性を強調する。「決定」は現代語では動詞として用いられるが、語録では副詞として用いられる。「決」、「決然」は副詞として現代語に残存しているが、「決定」の副詞用法は宋代以後徐々に衰退した。

「必竟」、「到底」、「的確」、「其實」、「確實」、「索性」、「一定」、「真箇」は近古に登場したと考えられる。これらの副詞は主に述語を修飾し、文の状語になる。語録ではこれらの語氣副詞は前代から引き続いてきたものより、用法が複雑である。修飾する述語の範囲が広く、動詞・動詞構造であったり、形容詞・形容詞構造、名詞構造であったり、また数量詞も修飾することができる。近古に生まれた語氣複音節化は、類義副詞から複合化されものが多い。非常に口語的で宋代以後にも白話作品にしばしば登場しており、現代語にも定着している。

2-2 推測・婉曲を示すもの

この種の副詞は事態、情況などに対して明確に判断できず、推測、疑問、概略の意を述べることを示す。この種の副詞を使用することによって、文の全体が婉曲的になる効果がある。語録ではこれにあたるものは34種類ある。「不妨」、「不免」、「大抵」、「大都」、「大凡」、「大率」、「大略」、「大體」、「殆」、「髣髴」、「蓋」、「幾」、「似」、「庶幾」、「未必」、「未免」、「猶」は前代から引き続き使用されているものである。「大概」、「大約」、「大綱」、「大故」、「多半」、「恐」、「怕」、「恐怕」、「略約」、「莫」、「幾乎」、「似乎」、「想」、「想必」、「想見」、「想是」、「約摸」は近古に登場したものである。以下、語録の用例を示す。

- 「不妨」・又曰：「凡讀書，且從一條正路直去。四面雖有好看處，不妨一看，然非是要緊。(朱・10-169)
- 「不免」・伯淳昔在長安倉中閑坐、後見長廊柱、以意數之、已尚不疑、再數之不合、不免令人一一聲言而數。(二・2上-46)
- 「大抵」・如此等事，亦當辨明，則知今之要路，大抵難處也。(龜・2-1)
- 「大都」・格物以身，伊川有此一說。然大都說非一。(朱・18-419)
- 「大凡」・大凡別事人都強得、惟識量不可強。(二・18-192)
- 「大概」・聖人教人，大概只是說孝弟忠信日用常行底話。(朱・8-129)
- 「大率」・大率言語須是含蓄而有餘意、所謂書不盡言、言不盡意也。(二・18-222)
- 「大略」・想李燾也不會見此事，只大略聞得此一項語言。(朱・130-3102)
- 「大體」・大抵程先生說與其門人說，大體不同。(朱・18-406)
- 「大約」・曰：「正緣如此，也須大約記得某年有甚麼事，某年有甚麼事。纔記不起，無緣會得浹洽。(朱・11-197)
- 「殆」・惟人則能知祖，若不嚴於祭祀，殆與鳥獸無異矣。(二・18-241)
- 「恐」・又云：“昔日用工夫甚多，但不敢說與諸公，恐諸公以謂湏得如此”。(上・中-3)
- 「怕」・“則”字怕誤，當作“不”字。(朱・32-810)
- 「恐怕」・如此用工夫，恐怕輕費了時月。(朱・95-2424)
- 「髣髴」・若便要立議論，往往裏面曲折，其實未曉，只髣髴見得，便自虛說耳：恐不濟事。(朱・80-2088)
- 「蓋」・猶執五寸以為中是無權也。蓋五寸之執長短，多寡之中，而非厚薄小大之中也。(龜・1-3)
- 「幾」・當時大亂殺傷之後，幾無人類，所以宇文泰與蘇綽能如此經營。(朱・112-2729)
- 「幾乎」・昔橫渠說出此道理、至此幾乎衰矣。只介父一箇、氣豔大小大。(二・2上-25)
- 「莫」・釋氏嘗言菴中坐，却見菴外事莫是野狐精。釋子猶不肯為，況聖人乎？(二・18-194)
- 「似」・退之每有一兩處、直是搏得親切、直似知道、然却只是博也。(二・19-262)
- 「未必」・不說與人是客，輕說與人人未必信，况使人生鄙悖之心。却是自家不是。(上・中-4)
- 「未免」・曰：謂之君子，豈有心不正者，當論其所行之是否爾，且以術行道，未免枉已。與其自枉，不若不得行之愈也。(龜・1-16)
- 「猶」・莫之敢指者、非謂手指莫敢指陳也、猶言不可道也。(二・2上-36)
- 「想」・謂之三墳書，則非也，道理却總是，想當時亦須有來歷，其間只是氣運使不得。(二・19-263)
- 「想必」・河間獻王得古禮五十六篇，想必有可觀。但當時君臣間有所不曉，遂至無。(朱・85-2193)
- 「想見」・曾皙末流便會成莊老。想見當時聖人亦須有言語敲點他，只是論語載不全。(朱・28-714)
- 「想是」・伊川之語，想是被門人錯記了，不可知。(朱・36-955)

「庶幾」・所謂日月至焉，與久而不息者，所見規模雖畧相似，其意味氣象迥別，須潛心默識，玩索久之，庶幾自得。（二・15-158）

「大綱」・伯淳當言職，苦不曾使文字，大綱只是於上前說了，其他些小文字，只是備禮而已。（二・2上-29）

「大故」・當初大故做工夫，揀難捨底棄却。後來漸漸輕，至今日於器物之類，置之只為合要，却並無健羨底心。（上・上-14）

「多半」・今人往往過嚴者，多半是自家不曉，又慮人欺己，又怕人慢己，遂將大拍頭去拍他，要他畏服。（朱・108-2689）

「略約」・大段著意，又卻生病，只恁地略約住。道著戒慎恐懼，已是剩語，然又不得不如此說。（朱・62-1499）

「似乎」・居敬則自然簡。居簡而行簡，則似乎簡矣，然乃所以不簡。（二・22上-294）

「約摸」・若不識得時，只約摸恁地說，兩雙腳也得，三雙腳也得；到坐時，只是坐不得。（朱・9-156）

「不妨」は勧誘する語氣が強く、「不免」は「仕方なく…せざるを得ない」という口調である。これらの副詞は現代語にも口語表現として多用されている。

「大抵」、「大都」、「大凡」、「大概」、「大略」、「大體」、「大約」は述語の前に置かれ、また文頭に置くこともできる。大体の情況を示す副詞「大」と物事の概略を示す副詞の複合詞である。叙述する事実が一般論であることや大多数であることを強調する。「大率」は偏正複合詞である。主に文頭や述語に前置し、意見や見解などが大体同じであることを示す場合が多い。宋代以後「大率」が衰退して、現代語では姿が消えたが、「大抵」、「大都」、「大凡」、「大概」、「大略」、「大體」、「大約」は現代語にも多用されている。

「殆」は上古から用いられ、動詞述語文、形容詞述語文、名詞述語文の前に置かれ、述語になる。現状などや物事の成り行きを推測する。

「彷彿」、「蓋」、主に動詞と述語の前に置かれ、間もなく行われる行動や情況を予測することを示す。

「恐」、「怕」、「恐怕」は近古に虚詞として働きをする。「恐」と「怕」が同義語複合化し、文中で心配や判断できない語気である。この用法は唐代にから登場し、引き続き使われている。現代語にも口語表現として多用されている。

「幾」、「幾乎」は上古から用いられ、語録に疑数詞として使われている場合もあり、また、前節で述べたように「僅差」を示す副詞の機能を有しながら、推測の意を示す副詞の機能をもつ。この場合は「殆ど…に近い」という意味で使われ、ある状態に接近することを強調する。語録では「幾」の副詞の機能は既に衰退し、代わりに「幾乎」という形式で用いられ、この用法は宋代以後にさらに発達して、現代語にも口語表現として頻用されている。

語録では「莫」は主に否定副詞として用いられるが、近古から予測を示す副詞としての機能がもたされ、語録に用例も多数ある。宋代の他の資料に「約莫」という類義複合詞で用いられる用例が数例あるが、語録には見当たらない。²⁾宋代からは「約摸」で代用されたと思われる。

「似」は上古に誕生し、中古に説話などの通俗文学に用いられるようになった。主に述語に前置し、行動や情況を判断できず、推測することを示す。近古から「似乎」という形式で用いられる。この用法は現代口語にも頻用される。

「未必」、「未免」は偏正複合副詞である。動詞述語、形容詞述語の前に置かれ、物事の信憑性や必然性に対して疑問を示す。「…とは限らない」の意味であり、婉曲的な否定表現である。この用法は現代に至って用いられている。李文澤（2000）は、「『想』は、元来の語義「想う、思考」から虚化されたと思われる。

虚詞からさらに「想必」、「想見」、「想是」のような類義複合詞として用いられるようになった」と指摘する。³⁾

呉福祥『敦煌變文語法研究』(1996)は、「『想』は副詞として唐五代に僅かの数例しかない。宋代に発達した」と指摘する。これらの副詞は主に述語を修飾する。述語の成分も範囲が広く、動詞構造、形容詞構造などである。⁴⁾「大綱」、「大故」、「多半」、「略約」は主に動詞・動詞構造の述語を修飾し、文の状語になる。これらの副詞は主に概略の意を示し、結果を強調する場合が多く、例外の有無は問わないことが多い。

2-3 疑問・詰問を示すもの

この種の副詞は疑問や反問の意を表し、語気を強めたり、弱めたりする。さらに、反問の形を用いて、否定の意を示す。語録では17種類ある。「何」、「何必」、「何不」、「何嘗」、「何苦」、「何須」、「曷嘗」、「可」、「寧」、「豈」、「豈可」、「不成」、「幾曾」、「究竟」、「那會」、「還」、「終不成」がこれにあたる。そのうち「不成」、「幾曾」、「究竟」、「那會」、「還」、「終不成」が近古に誕生したものである。

語録では次のような用例がある。

「何」・至於禹之言曰：何畏乎巧言令色？（二・2上-25）

・此説天下已成風、其何能救。（二・2上-23）

・文定遜謝曰：“某何敢當「至誠」二字”？（朱・64-1566）

・命者所以輔義，一循於義，則何庸斷之以命哉？（二・11-125）

「何必」・既當理後，又何必就上更生疑。（朱・6-109）

「何不」・孔子之時，皆足以為孔子矣。曰：何不思之甚也？（龜・1-11）

「何嘗」・曰：先儒謂孔子學易後可以無過，此大段失却文意。聖人何嘗有過？（二・18-209）

「何苦」・次日，吏人杖脊勒罷，偶一相識云：“此是人家子弟，何苦辱之”？（朱・106-2641）

「何須」・且如性，何須待有物方指為性？（二・18-185）

「曷嘗」・曰：“某非不欲周旋人事者，曷嘗似賢急追”？（二・3-65）

「可」・言行，君子之樞機；樞機之發，榮辱之主也。言行，君子之所以動天地也，可不謹乎。（朱・9-156）

「寧」・先生曰：“然，觀其論婦人不再適人，以為寧餓死，若不是見得道理分明，如何敢説這樣話”。（龜・4-12）

「豈」・正叔指墳園曰：“吾儒從裏面做，豈有不見。佛氏只從牆外見了，却不肯入來做”。（上・中-5）

「豈可」・祭祀須別男女之分。生既不可雜坐，祭豈可雜坐？（二・17-180）

「不成」・知、勇亦然。不成却以不憂謂之知、不惑謂之仁也？（二・1-2）

「幾曾」・聖人又幾曾須以己度人！自然厚薄輕重，無不適當。（朱・2上-27）

「究竟」・夜來說神仙事不能得了當，究竟知否？（朱・114-2766）

「那會」・又如漢高祖為義帝發喪，那會出於誠心。只是因董公説，分明借這些欺天下。（朱・23-550）

「還」・或問：“格物須物物格之，還只格一物而萬理皆知”？（二・18-188）

「終不成」・如今看來，終不成才會得讓底道理，便與曾點氣象相似。（朱・40-1039）

「何」は上古から代詞、副詞として用いられ、この用法と機能は引き続き受け継がれている。語録では「何」の語義は複雑である。述語に前置し、「何+述語+乎+賓語」の構造が最も多く、主に原因や理由を尋ねる。また形容詞や形容詞構造、文の前頭に置かれ、語気を強める。

「何必」、「何不」、「何嘗」、「何苦」、「何須」、「曷嘗」は副詞の連用から複合詞になったものである。述語に前置し、

反語の語気で否定の口調を強める。「曷嘗」は「何嘗」の異体詞である。これらの副詞は現代語にも口語表現として頻用されている。

「可」は疑問と反詰の語気を示す。語録では、前代に引き続き助動詞の機能も依然として存在する。疑問や反詰、感嘆の語気を表す以外、動詞に前置し、話の筋や語気を変える際用いられる。また、物事や情理がそうであるべきことを強調する。張相（1945）は『『可』の語気の機能は元明以後に消えた』と指摘する。⁵⁾

「寧」は述語を修飾し、反詰の口調である。

「豈」は述語や文頭の前に置かれ、反詰の語気を示す。また推測、尋ねる語気で用いられる場合も多い。また、助動詞や他の副詞と連用し、さらに詰問の口調を強める。「豈可」は同義複合詞であり、感嘆や疑問を示し、反詰や尋ねる口調で用いられる。

「不成」、「終不成」は反詰を示す複合詞である。蔣冀騁（1996）は『『不成』、『終不成』は宋代に誕生し、明元に文末に移り、性質や機能も変化し、語気副詞から語気助詞に変遷した』と指摘する。⁶⁾

「幾曾」、「那曾」は動詞述語を修飾し、文の状語になる。反詰の口調を示す。

「究竟」は動詞・代詞述語を修飾し、状語になる。強い口調で疑問を表し、原因や結果を追究するが多い。

「還」は疑問副詞として唐五代に登場したと思われる。蔣冀騁（1996）は「還」について考察し、次のように述べている。『『祖堂集』、『敦煌變文集』にも用例があり、『還』は文中で疑問の語気をもたされた。宋代の禪宗資料にもしばしば用いられるが、禪宗以外の資料には殆ど用例が見えない。元・明時代になると、一部の白話小説に僅かの用例が見えるが、実際には疑問副詞としての機能は既に消えた』と。⁷⁾

3 終わりに

以上、宋代における五つの語録をテキストとして、語気副詞を中心にその特徴や諸性格に着目して考察を加えた。

本稿でテキストとして宋学の語録は北宋から南宋にわたって編纂された大部の書であり、内容の幅も広い。五つの語録は合計175巻、総文字数は約2,720,000字であり、副詞は述べ432種類にのぼる。その中、語気副詞は90種類ある。⁸⁾

以下、宋学語録の副詞の使用状況と特徴を表にまとめる。

表 3-1

副詞	種類*1)	単音節2)	複音節3)	上・中古4)	近古5)	実詞6)	虚詞7)	単純8)
程度	78	39	39	48	30	29	5	48
範囲	68	38	30	60	8	28	8	40
時間	102	43	59	75	27	28	5	68
情態	75	33	42	49	26	28	1	46
否定	19	11	8	15	4	3	1	15
語気	90	26	64	57	33	24	5	61
合計	432	190	242	304	128	140	25	278

*1) 各副詞の種類数。

*2) 単音節副詞の数。

- *3) 複音節副詞の数。
- *4) 上古・中古から用いられる副詞の数。
- *5) 近古から用いられる副詞の数。
- *6) 実詞の機能をもっている副詞の数。
- *7) 副詞以外の虚詞の機能をもっている副詞の数。
- *8) 副詞の機能のみをもっているもの。(ただし、いくつかの副詞の機能をもっているものを含む)

表 3-2 各副詞の使用比率表

副詞	種類	単音節	複音節	上・中古	近古	実詞	虚詞	単純
程度	18%	9%	9%	11.1%	7%	6.7%	1.2%	11.1%
範囲	15.7%	8.8%	6.9%	14%	1.9%	6.4%	1.9%	9.3%
時間	23.6%	10%	13.7%	17.3%	6%	6.4%	1.2%	15.7%
情態	17.3%	7.6%	10%	11.3%	6%	6.4%	0.2%	10.6%
否定	4.4%	2.5%	1.9%	3.5%	0.9%	0.7%	0.2%	3.5%
語気	20.8%	6%	14.8%	13.1%	7.6%	5.5%	1.2%	14.1%
合計	100%	43.9%	56%	70.3%	29.6%	32.4%	5.8%	63.4%

上の表をみると、語録の副詞の使用状況と特徴、機能がかなり明瞭になる。

機能から言えば、宋代の語気副詞は中古より修飾範囲が広くなり、用法の柔軟性もみられる。また、語気副詞は数が多く、複音節化が顕著である。語録では26種類の単音節詞に対して、複音節詞が58種類ある。また、実詞の機能を有する副詞は22種類であるに対して、単純副詞は57種類がある。これによれば、宋代の語気副詞は既に副詞の機能のみを担うものが多いということが分かる。語気副詞の発達は口語化を反映するものであろう。これらの副詞は口語表現や感情表現と共起しやすく、一部の語気副詞は宋代以後も強い生命力を持って、現代漢語に定着し、口語表現として頻用されている。

また、語気副詞の使用頻度が高いことも特徴であるから文体の口語化が活発に進んでいくことが明らかになり、副詞の変化により、文法の諸形式も変化し、そのことは語彙の全体の変遷にも大きな影響を与えたと考えられるのである。

「付記」本稿は、博士学位論文「宋代語録における副詞研究」の第三章を基礎として整理し、修正したものである。

注

- 1) 『二程集』 中華書局 2004年版 25巻
『龜山語録』 (中国国家図書館蔵宋福建省漕治刻本版本影印原書) 4巻
『張載集』 中華書局 1978年版 3巻
『上蔡先生語録』 明正徳八年汪正刻本影印 3巻
『朱子語類』 中華書局 1986年版 140巻
- 2) 我門約莫記得客長到被它打。『張協狀元』第8出
- 3) 李文澤 (2000) 『宋代語言研究』 p 289 線装書局
- 4) 吳福祥 (1996) 『敦煌變文語法研究』 p 157 丘麓書社
- 5) 張相 (1945) 『詩詞曲語辭彙釈』 p 51 中華書局 (1955版)
- 6) 蔣冀騁 (1991) 『近代漢語詞彙研究』 p 451 湖南教育出版社
- 7) 蔣冀騁 (1991) 『近代漢語詞彙研究』 p 448 湖南教育出版社
- 8) 『朱子語類』の約2,300,000字は中華書局(1986版)権説明を参考したものである。

参考文献

- 1) 太田辰夫 (1957) 『中国語歴史文法』 朋友書店
- 2) 王力 (1958) 『漢語史稿』 中華書局 1980年版
- 3) 楊榮祥 (2004) 『近代漢語副詞的發展』 商務印書館
- 4) 蔣冀騁 (1991) 『近代漢語詞彙研究』 湖南教育出版社
- 5) 李文澤 (2000) 『宋代語言研究』 線装書局
- 6) 唐賢清 (2003) 『朱子語類』副詞研究』 湖南人民出版社
- 7) 吳福祥 (1996) 『敦煌變文語法研究』 丘麓書社